
白と黒の虚像～トライアングル～

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白と黒の虚像〜トライアングル〜

【Nコード】

N3222F

【作者名】

神童サーガ

【あらすじ】

テーマは「三角関係」の短編。叶いそいで叶わない想い。オリキヤラあり

（前書き）

初の別次元の話を書きました。今日（10/20）に怪盗キッドが出るから！！

佐伯 律さえき りつ

容姿・水色のショートヘアに水色の瞳

職業・高校生探偵（十三歳から始まり外国が主だった）

性格・悪いモノ大っ嫌い。照れ症（キザなのは苦手）

金澤 彩かなざわ さい

容姿・金髪でキッドと同じ髪で金色の瞳

職業・怪盗ウィッチ（種も仕掛けも無い魔法）

性格・純粹だけど素直じゃない

備考・四年前から外国で怪盗やってたが、高校生になり日本へ来た。
律を溺愛。

「リッ！！」

「どうしたの？青子」

「まだ捕まえられるの？キッドとウィッチ」

「・・・ごめんなさい」

「あつ、律は悪くないよ！！」

とある高校の2年B組。セミロングの髪の子が、両手を大きく

上下に動かしながら、水色のショートヘアーの女の子に話し掛けている。

水色のショートヘアーの女の子・・・律は悲しげに言った。
セミロングの髪の女の子・・・青子は、すぐに否定した。

「なんの話だ？」

「あ、快斗・・・」

「昨日のキッドのことよ・・・黒羽くん」

「へボ警部も探偵も“また”やられたんだな」

「・・・」

「バ快斗!!」

黒髪の少年・・・快斗は、嘲笑った。それに悲しむ律。それを見た青子は快斗に怒った。

「警察と怪盗は相容れぬ仲だからな」

「彩くんはどう思うの!？」

「俺か?・・・ウィッチの味方だな」

「彩は毎回そうだよね!!」

話に乱入してきたのは、快斗と同じ長さの金髪の少年・・・彩だった。

キッドとウィッチというのは、今世間を賑わしてる怪盗なのだ。

キッドは、全身白でまとめ、モノクルを右目にしてる神出鬼没な人。
ウィッチは、その反対で黒でまとめ、モノクルを左目にしてる神出

鬼没な魔女。

「捕まえるなんて馬鹿げてるぜ」

「それに関してなら俺も同意見だ黒羽」

「マジック出来るコンビだからって・・・」

「俺のは魔法だ。種も仕掛けも無いんだよ」

「はぁ・・・」

夜になり、今日は怪盗キッドの予告日なのだが、具合を悪くして、来れなかった。

律は、ベットで寝てるとベランダから物音がし、ソッとカーテンと窓を開けた。

「っキッド!!」

「今日来てないので心配しましたよ」

「・・・」

キッドはお姫様にするように、手の甲に口付けた。律の顔がトマトのように真っ赤になる。

「っ・・・心配・・・されることなんて・・・」

「具合はいかがですか?」

「っ・・・大丈夫だもん」

「ふふ・・・それは良かったです」

「怪盗が探偵を心配しないでよ」

「一人の男としても、ダメなんですか？」

「！！」

キッドの言葉に更に赤くなる。

頭から煙が出るんじゃないかというくらいフラフラだ。

そして、律の意識は途切れた。

「律！！・・・具合悪かったんだな」

キッド・・・いや、黒羽快斗は自分に倒れてきて慌てて支えた。

「そこまで具合悪かったのか・・・スゲー熱だな・・・」

快斗は、律の部屋に入り込んだ。高級アパートの一室で、物があまり無い。シンプルでまとめられている。

快斗は律をベットに優しく置いた。

「ちゃんと食ってんのか？」

持ち上げた時、軽過ぎて壊れてしまうのではないかと不安になった。

タオルを濡らして律のオデコに乗せた。

「・・・キッド何してるのですか？」

「・・・ウィッチですか」

ベランダから聞こえてきた声に驚いた快斗。
振り返ると黒でまとめたウィッチがいた。

「り・・・探偵に何の用ですか？」

「・・・その宝石は」

「残念ながらパンドラではありませんよ」

「！！！」

ウィッチは、キッドに話し掛けた。

キッドは話を逸らしたが、ウィッチの発言で少し表情が変わった。

「俺も探してんだ・・・黒羽」

「！！何のことでしょう」

「俺の親父も関わりがあつてな」

「・・・」

「くくつ・・・俺は金澤彩だ」

「彩！？」

「取り敢えず、場所変えよーぜ。律にバレたらな」

「あ、ああ」

ウィッチ・・・金澤彩は外に指を指しながら言った。快斗は、それに賛同し、外へ消えてった。

「ねえ律？」

「なに？青子」

「快斗達遅いね」

次の日、病気は治り、学校に来た。快斗と彩が来ないらしい。

「・・・青子って黒羽くんのこと、好きなの？」

「！！」

青子は律の言葉に真っ赤になる。律は、その様子に、ああ、と頷いた。

「り、律は彩くんはどう思うの？」

「ただの幼馴染みだし・・・それに・・・私は」

（キッドが気になるなんて・・・）

青子が快斗を好きなら、応援をしようと考えてる律。

でも、それ以上に探偵が怪盗に惚れるなんて・・・と後悔してる。

「よっ!!」

「きゃっ!!」

「黒羽脅かすなよ・・・」

「快斗!!」

「大丈夫か? 律」

「う、うん」

「具合良くなつたのか? 佐伯・・・」

「な、なんで黒羽くんが知ってるの?」

「・・・?」

「律・・・具合悪かつたの?」

「!?!」

「・・・顔色が、わりーからだよ!! な? 黒羽」

「あ、ああ!!」

「・・・そう?」

快斗の失言に律は怪しむが、彩のフォローでなんとかなった。
でも、怪しんだままだった。

「さっき何の話してたんだよ」

「黒羽くんって・・・青子どう思ってる?」

「なっ!! 律!!」

「・・・」

「（分かりやすい二人だな）」

快斗と青子は真っ赤になっている。律と彩は同じことを思った。
ついでに、良いなあ、とも思っただらしい。

「（キッドと会いたいなあ）」

「（律と・・・）」

叶わない三角関係が出来上がった。

快斗と青子は、誰もが分かるだろう。

律は、キッドという、禁断な想い。

彩は、そんな律を想っている。

この想いは、一生叶わないのか？

（後書き）

何となく三角関係で叶わないってのを作りたくなって書きました。
連載とかなら叶っても良いかな？と・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3222f/>

白と黒の虚像～トライアングル～

2010年10月21日01時48分発行